

# 「イスラエル建国史」

## 12 ユダヤ自治領主義の誕生と終焉

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人  
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館

チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。

現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

◆先月号の内容◆ ヘルツェルらシオニストが活動する中、各地でボグロムが起こり、ユダヤ人国家建設を求める声は高まっていった。こうした中で第6回シオニスト kongress が開催され、ヘルツェルは東アフリカ入植に関するイギリスの提案を披露する。この提案は万雷の拍手に迎えられたが、強硬な反対派によってシオニスト運動は分裂の危機に陥る。分裂を避けるべくヘルツェルは kongress の拡大委員会を開催し、分派を防ぐことに成功するが、心労が重なり、肺炎で死亡してしまう。

### シルキンの社会主義シオニズム



東アフリカ入植案(ウガンダ計画)が発表された時、熱烈に歓迎した人がいた。ロシアのモギリョフ(現ベラルーシ共和国

東部)出身で社会主義シオニズムの提唱者ナフマン・シルキン(1868～1924)である。ホベベイ・ツイオンのメンバーであったが、ミンスクで革命運動に関与したため当局にいらまれ、20歳の時国外へ脱出した。ベルリン大学で哲学を学んだ後、オーストリアの社会主義月刊誌『ドイッチェヴォルテ』に発表したのが「ユダヤ人問題と社会主義ユダヤ人国家(Die Judenfrage und der sozialistische Judenstaat)」(1898)である。この論文は同じ年にパンフレットとして出版された。

シルキンはその著書で「我々は社会主義を目指す、階級闘争だけが社会主義の道ではない。ユダヤ人社会主義は、物的欲求に動かされるだけではなく、ヘブライの預言者のビジョンからその精神的糧を得ている。ユダヤ人はゲウラー(救済)のビジョンを共有する。シオニズムはそのシンボ

ルであり、実践的表現である」と主張した。

シルキンの考える新しいユダヤ人社会は、協同組合方式をとり、ボランティア精神で運営される。

シルキンは行動の人で、持論をすぐ実行することを考えた。しかし当時のシオニズム運動は外交や政治活動に重点がおかれ、エレツイスラエルへの移住が円滑ではない。業を煮やしている時、ウガンダ計画が提案



ナフマン・シルキン

されたのである。シルキンは1905年初めユダヤシオニスト社会主義労働者党(Jewish Zionist Socialist Workers' Party ZS)を作った。ユダヤ人が正常な経済構造を築けるのは、「自由な民族生活、社会、経済生活が送れる自由な自治領でのみ可能」という。

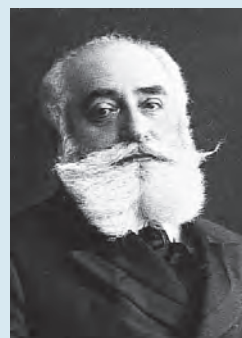
### 第7回シオニスト kongress

第7回シオニスト kongress は、1905年夏(7月27日～8月2日)に開催された。場所はバーゼルである。会議は、マックス・ノルダウのヘルツェル追悼演説で始まった。会場は厳粛な空気に包まれたが、討議が始まると空気は一転して荒れ模様になった。

荒れた原因は、東アフリカ入植案である。調査団は、大量移住に適さない、という意見であった。投票で決めることになったが、ツイオネイ・ツイオン(シオンびとのシオン)の多数派工作が功を奏し、結果は反対派の勝ちである。東アフリカ入植案は、圧倒的多数で否決された。

しかし、票決で敗北した賛成派は、そのまま引きさがつたわけではない。ナフマン・シルキンやマックス・ノルダウ賛成派40名は世界シオニスト機構を脱会し、kongress と並行する形で、7月30日から8月1日まで会議を開いた。

東アフリカ入植案賛成派は、ユダヤ自治領会議(Jewish Territorial Organization ITO)を設立した。そして、「現住地に踏みとどまることができず、ふみとどまりたくないユダヤ人達のために、自治生活の可能な土地を取得」するために、行動することになった。当初本部はワルシャワにおかれたが、名誉会長になったザングウィルが外交活動を本格化するに従い、1906年初めロンドンに移った。ITO発足当時は、ロシア、ウクライナでボ



マックス・ノルダウ

グロムが頻発し、それに比例して賛同者も増えた。ロシア・東欧に60ヶ所、イギリスに46か所の支部が生まれたのである。

しかし、ITOの事業の方はうまくいかなかった。ロンド

ンに戻ったザングウィルは、すぐアルフレッド・リッテルトン植民地相に書簡を送り、東アフリカ入植計画の継続を要請した。しかし植民地相は9月15日付の返信で、シオニスト kongress は正式に否決している、ITO は代表権があるのかと問い、kongress の否決を受けて、アフリカ保護領担当に計画破棄をすでに指示した、と回答した。

その後イギリスは保守党政権となり、ザングウィルは1906年3月26日に新植民地相ロード・エルジンと会った。エルジン植民地相は、入植に必要な巨額の資金は調達できるのか、入植事業の実務責任者は誰かと問い、外交活動を中心としているザングウィルは答えに窮した。

ザングウィルは、オーストラリア、カナダに打診した。しかし、ロシア系ユダヤ人が集団で入植し、独自性を保ちつつ存在すること自体に、拒否反応を示すところが多かった。その後キレナイカ(リビア東部、1908)、メソポタミア(イラク、1909)、アンゴラ(当時ポルトガル領西アフリカ、1912)と打診したが、いずれもうまくいかなかった。

唯一うまくいったのが、アメリカの銀行家ヤコブ・シフ(1847～1920)の資金援助を得て実施したガルベストン運動である。テキサス州ガルベストンを経由してアメリカ南部に入植する方法で、1907年から第一次世界大戦前まで、ロシア系ユダヤ人約9,300人が移住した。

## ヤコブ・シフ

ヤコブ・シフは帝政ロシアのユダヤ人迫害に心を痛め、日露戦争時にはどの国からも断わられた日本の戦時債券を引き受け、戦費調達に協力した人物として知られる。生前ヘルツェ



ザングウィル

ルはシフに救助を求めようとしていた。1904年4月、シフがフランクフルト(アムマイン)へ来た時、会おうとしたが、病すでに重く会うことができなかった。シフは困窮同胞の救済に援助を惜しまなかった。1908年にエルサレムを訪れ、各地を視察しているが、ハイ

ファのテクニオン工科大学建設資金として10万ドルを寄付し、アロン・アロンソン(後述)の農業試験場建設にも資金援助をしている。しかしシオニズム運動はあまりにもユートピア的で、現実的ではないと考えていた。

## 自治領主義の終焉

ザングウィルらの考えた自治領主義(Territorialism)は、結局うまくいかなかった。それに、ザングウィルが熱心に運動を展開した当のイギリスで、ハイム・ワイツマンを中心とした別の動きが、始まっていた。そしてそれはバルフォア宣言をもたらすのである。この宣言がでた後自治領主義にかかわった人々の多くは、世界シオニスト機構に復帰した。そしてザングウィルは、死亡する1年前の1925年に運動の終結宣言を行った。

しかし、自治領主義が完全に消滅したわけではない。ヒトラーの登場でユダヤ人迫害が本格化し、イギリスがユダヤ人のパレスチナ移住を制限した時に、自治区獲得をめざすフリーランド運動が生まれている。だが大きい勢力にはならなかった。

ザングウィルと並ぶもう1人の活動家シルキンは、ベルリン、パリ、ロシアと転々とした後1907年にアメリカへ移住し、2年後パレスチナ移住

を目指すポアレイ・ツィオン運動(世界シオニスト機構及びブントの離脱者が1899年ごろ結成)に参加し、シオニスト機構に復帰した。自治領主義がうまくいかないことを認識したのである。

シルキンの提唱した社会主義シオニズムは、建国運動のひとつの柱となり、キブツ運動やモシャブ運動などイスラエル社会の性格形成に大きい影響を及ぼした。

## ブント結成

19世紀末にユダヤ人が起こした社会主義運動は、あと1つある。ブントがそうである。ブントは1897年9月ビルナで結成され、正式名称をロシア・ポーランドユダヤ労働



テクニオン工科大学

総同盟(Algemeyer yiddisher arbiter bund in rusland un polyn、後にリトアニアを加えた)といい、居住地住民と共に自由と民主主義を勝ち取る戦いをスローガンとした。シオニズムに強く反対し、1901年の第4回ブント大会で、シオニストの追放を決議している。ユダヤ人を固有の民族集団とは考えなかったが、第一次世界大戦の前から、イーデッシュ語文化は認めるようになる。

しかし、まわりはやはり彼らを区別し、他者とみなすのである。ロシアでは1917年の革命で勢力をひろげたものの、1921年に弾圧され、潰滅状態になった(メンバーの一部は、ポアレイ・ツィオン、自治領主義者の残党と共に共産党に入党した)。一方大きい政治勢力になったポーランドでは、ナチスドイツによって抹殺されてしまった。

まわりの世界でさまざまな運動が消長している頃、エレツイスラエルでは、1904年に始まるいわゆる第2アリアの時代を迎え、将来を予見する動きが出ていた。